

日本キリスト教会 大阪北教会

2017年6月17日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 使徒言行録2章43節～47節

43 全ての人に恐れが生じた。使徒達によって多くの不思議な業とするしが行われていたのである。44 信者たちは皆一つになって、全ての物を共有にし、45 財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合っていた。46 そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられていた。こうして主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

説教『民衆全体から好意を寄せられた最初の教会』

序) この聖書の箇所は、毎年聖霊降臨節の時期に一度は読むのが恒例であります。しかし、この箇所は、年に一度読めばよいというような箇所ではなく、ここに記されている事、ここに証しされている事が、キリスト教会の原像であるのですから、これを読んだわたしたちが、全ての日々にわたって、これを生きることこそが肝要であります。今日の箇所において用いられています動詞は全て、一度起こった事の持続、継続を現わすものであります。

- 1) 何よりもまず、「すべての人に恐れが生じた」のです。そしてそれが持続したのです。冒頭の43節に、「すべての人に恐れが生じた」とあります。繰り返して来ましたように、この「恐れ」と訳されているのは、やはり「畏れ」という字を当てるのが良いと思います。もろもろの「恐れ」を超越する神様への「畏敬」であります。この「畏敬」において、一再の「恐れ」「恐怖」「不安」「思い煩い」からさえも解放されるところの、ただ「神様への畏敬」であります。そのような「畏れ」が生じ、それが持続したのであります。
- 2) そして、この「すべての人に畏れが生じた」という、「すべての人」というのも、「全ての魂に畏れが生じた」と訳すべき言葉であります。「心中の畏れ」と云ったのでは不十分で、やはりこれは、「魂における畏れ」であります。そして、「魂」という字は、「呼吸する」という動詞の派生語ですから、人間

の命の営み全体と云ってよいでしょう。生活の息遣いに、「神様に対する恐れ」が感じられるということでもあります。神様に対する、主イエス様に対する、聖霊様に対する畏敬であります。この畏敬が続く限り、教会は生きた教会であり、イエス様が主として御臨在なさっておられる「キリストの教会」です。そのキリストの体である教会の肢々とされているわたしたち一人一人の魂に恐れがある限り、わたしたちが如何に自由に振る舞っても、それは神様の御栄光を傷つけるものには決してなりません。そのすべての立ち居振る舞いにおいて御栄光が現れるに違いありません。そして、そのような「魂における恐れ」が持続したのです。最初のキリスト者は、父なる神様の御臨在・主イエス様のご臨在、そして御霊なる神様に包まれて、日々生きたのです。先日も紹介させていただきましたが、今、住友病院に入院されています丸山雄司兄の愛唱聖句は、マタイ福音書の末尾のイエス様の約束の御言葉です。「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたと共にいる」であります。この御言葉の主イエス様の御愛から私たちを引き離し得るようなものは、金輪際、この世には存在しないのです。

- 3) 43節の後半に、「使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていたのである」とあります。「不思議な業とするし」とは、生前のイエス様が為さっておられた奇跡や癒しの事であります。それが今、「使徒たちによって」なされているのであります。人々が驚いたのも無理はありません(2章9～10節)。しかし、3章1節以下の記事によっても明らかなように、それを行なっている使徒達には、自分を誇ると言った素振りは何処にもみられません。正に、聖霊降臨の持続なのであります。聖霊として御臨在なさる主イエス様が使徒たちの魂と一体となられて、主イエス様御自身がその御業を為さっておられるのであります。
- 4) 正に、聖霊のバプテスマが大事であります。私達の中には水の洗礼を受けていないキリスト者は一人もおりません。しかし、聖霊のバプテスマを受けることが大事なのです。47節の後半にこうあります。「使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていたのである」と。これは主イエス様が、生前なさっておられた奇跡、癒しの業の数々であります。先程も触れましたが、今日の箇所すべての業と出来事は、使徒達の業であり、信者たちの行いであり、民衆の行為であります。しかし、それを総括するように、47節の後半に、「こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」とあります。つまり、人の業と主イエス様の業とが一つにされているのであります。正に、聖霊様に浸され、満たされた人々が、主イエス様と一体

なる者として、生きているのです。これが、聖霊のバプテスマであります。
「バプテスマ」を、わたしたちは「洗礼」と訳しますが、直訳は「浸されること」であります。「水のバプテスマ」は「聖霊のバプテスマ」の見える徴であります。キリスト者とは、「聖霊に浸され包まれた者」のことです。聖霊のバプテスマが必須、肝要なのであります。

- 5) 46 節以下にこうあります。「46 そして、毎日ひたすら心をつつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられていた」と。ここに「神を賛美していた」とありますが、神様に対する畏れは、神様に対する賛美と一つであるところの畏れであります。「畏れ」に喜びの「賛美」が伴ってこそ、それは「真の畏れ」であります。私たちが讚美歌を歌う時、口先だけで歌うのではなく、喜びのほとばしりとして、「自由にされた魂の賛歌」であってこそ、讚美歌に相応しいでありましょう。
- 5) もう一度 44 節以下をお読みいたします。正に、ここに「神の国」が生起しているのであります。「44 信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、45 財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合っていた。46 そして、毎日ひたすら心をつつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられていた。」具体的には、わたしたちも高齢となり、身体が弱り、年金暮らしになれば、日曜日の礼拝に出席するのも、物心両面で難しくなります。しかし、44 節～45 節にこうあります。「45 信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、45 財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合っていた」と。これを、わたしたちの教会で具体化するとすれば、どうなるのでしょうか。7月の第2週の礼拝後に「教会全体協議会」を計画しています。主題は、「今・ここでの教会の課題」であります。今日の聖書の個所を良く読んで、初代教会のあり方を、今日・ここで私たちが生きるとすれば、どうなるのか考えてみたいと思います。
- 6) それにしましても、初代教会には、隔ての壁はなかったことが伺えるのであります。47 節にこうあります。「47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられていた」と。ここに「好意」と訳されている言葉は、ギリシャ語では「カリス」であって、通常、神様の「恵み」を現わす言葉であります。それこそ、この数千人に膨らんだ教会は、今日でいう「難民」のような状態だったと思われまふ。それらの人々が「民衆全体から好意を寄せられていた」

のであります。ですから、「好意」は具体的には「施し物」であります。本当に、目を見張るような様子であります。今の今まで、人と人との間を隔てていた壁が瓦解したのです。私達の教会が炊き出しを行なうようになったきっかけは、阪神淡路大震災でありました。そしてその後、西成愛隣地区の炊き出しに参加し、そして地元・中之島の炊き出しに転じて十数年になりますが、その当初、「炊き出しの為に」として、匿名で百万円の献金が送られて来ました。そして、それ以来、今も毎年、全国の諸教会・個人の方々から、百万円に近い献金が送られてまいります。その外に、御米や衣類や、様々な物品が送られてまいりまして、不自由はありません。わたしたちは「勤労奉仕」をするだけで足ります。そして奉仕者に欠けることもないのは誠に有難い事です。しかし、私たちの現状はなお、高層マンションに住んでいる者もあれば、文字通り、今も橋の下で野宿している人もいますのであります。この状態を何とか改善したいですね。

- 7) 始めに申し上げましたように、いずれにしても持続が大事なのであります。三位一体であられる神様の御顧みと御恵みとは、絶えることはありません。毎週の礼拝において始めに聞きます御言葉、詩篇第117篇にある通りです。

「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。

主の慈しみと真は永久に、わたしたちを超えて力強い。ハレルヤ。」

この「主の慈しみと真はとこしえに、わたしたちを超えて力強い」と訳されている御言葉は、「主の慈しみと真は永久に、わたしたちを覆って揺るぐことはない」との意味合いに訳し得ます。主イエス様は、世の終わりまで、いつも、私たちと共にいてくださいます。聖霊様は、わたしを覆い、私の内に、わたしの命として生きて働いていて下さいます。明日のことを思い煩わないで、全てをイエス様の御手にお委ねして、神様を畏れつつ、讚美しつつ、互いに、喜びと痛みとを、共有、共感しつつ、歩もうではありませんか。

- 8) お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神様。あなたが御霊なる神様として、わたしたちと共にいまし、わたしたちの内にいまして下さることは、何という幸いに私たちが、与かっている事か、改めて、身の幸いを覚え、心から感謝いたします。あなたの慈しみと真とが、永久に、わたしたちを覆っていて下さって、揺るぎないことを改めて、思い知らされて、心から感謝いたします。どうか、わたしたちをして、御心にかなう歩みをなさせてください。この感謝と願いとを、主イエス様の聖名を通して御前にお捧げいたします。アーメン。